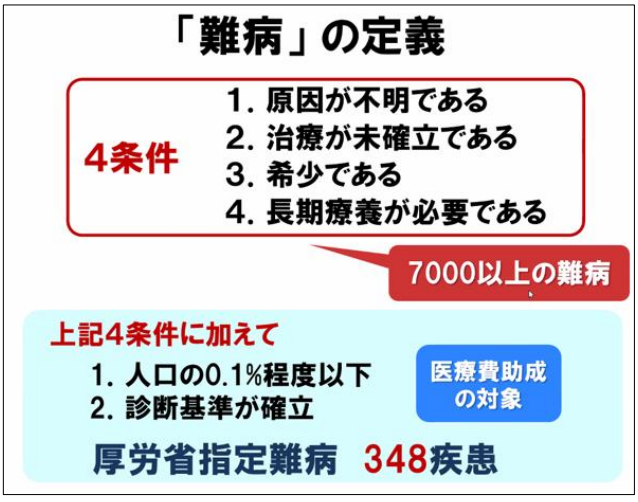
奈良県立医科大学・MBTコンソーシアム
MBT NEWS LETTER
第416号
‘26/09/09

9/5（土）、第11回難病克服支援WEBセミナーを開催
嶋緑倫氏（奈良医大理事長）は“血友病治療を変えた創薬イノベーション”を、中山優季氏（東京都医学総合研究所リーダー）は”難病看護の重要性“を講演

（左上）杉江和馬奈良医大教授　（右上）細井裕司MBTｺﾝｿｰｼｱﾑ理事長
（左下）嶋緑倫奈良医大理事長　（右下）中山優季医学総合研究所ﾘｰﾀﾞｰ



・奈良医大とMBTコンソーシアムの共催による難病克服支援WEBセミナーは、9月5日（土）午後に第11回目が開催されました。

・今回は、医学的治療の飛躍的進歩（Cure）と患者の尊厳ある生活を支える看護実践（Care）の最新知見を統合し、難病克服に向けた次世代の戦略的ビジョンを示すセミナーとなりました。

・第1回以来司会進行役を務められる奈良医大脳神経内科の**杉江和馬教授**からは、難病定義の紹介（左下資料）と、奈良医大を中心にICTや相談体制を活用した病院間連携医療ネットワークを構築した奈良県の難病医療体制が紹介されました。

・また開会に先立ち、**細井裕司MBTコンソーシアム理事長**から“MBT 活動は、医学の知見を病院内にとどめず、まちづくりや産業創生、社会課題解決に生かす新たな社会モデルである“と改めて紹介がありました。

・1番目に講演の**嶋緑倫氏（奈良医大理事長・学長）**からは、自身の血友病研究を話題に“奈良医大と中外製薬の産学連携から生まれたエミシズマブが血友病治療を革新し、患者のQOL向上と健常者に近い活動性の実現を拓いた”

また、2番目に**講演の中山優季氏（東京都医学総合研究所リーダー）から**は“難病看護は患者の「その人らしく生きる」生活環境を支える実践看護、先端技術と多職種連携により、意思伝達と尊厳を守る新たな支援を実現する“

と、それぞれの実績と体験に基づく講演をなされました。

裏面に詳細を紹介します。

発行
（一般社団法人）ＭＢＴコンソーシアム、　（公立大学法人）奈良県立医科大学
奈良県橿原市四条町840番地研究推進課内　担当　塩山
ＴＥＬ：0744-29-8853（直通）、ＦＡＸ：　050-3164-5598、　Email：mbt@mbt.or.jp

第11回MBT難病克服WEBセミナー講演概要

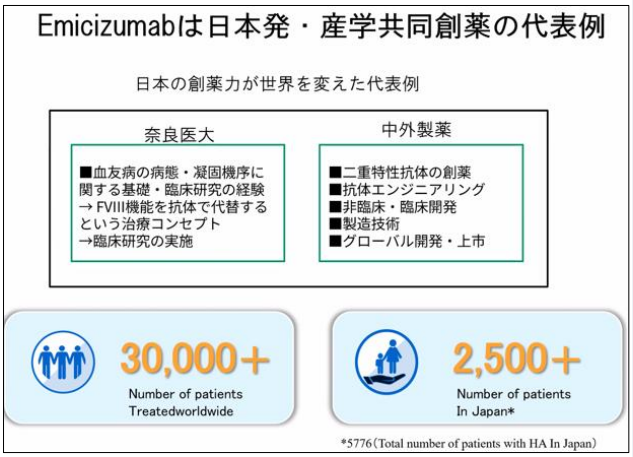
嶋　緑倫　氏　　奈良県立医科大学理事長・学長

『血友病治療の進歩と未来への希望』

血友病治療の歴史は、疾患の分子メカニズムを解明し、それを治療薬の開発につなげることで、患者の生活を大きく変革できることを示している。

その象徴が、奈良県立医科大学と中外製薬の産学連携から生まれた二重特異性抗体「エミシズマブ」である。本剤は、第8因子の機能を模倣し、第9因子と第10因子を橋渡しすることで凝固反応を促進し、従来治療の大きな課題であったインヒビター保有患者にも有効な止血を可能にした。さらに、皮下注射による投与を実現し、患者の治療負担と生活上の制約を大幅に軽減した。現在は次世代製剤の開発も進み、血友病治療の目標は「出血を止める」ことから、「健常者と同等の活動性を実現する」ことへと進化している。

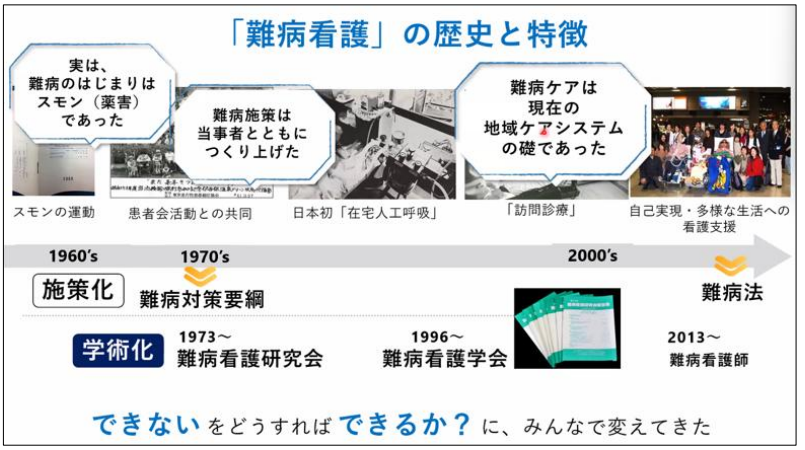
エミシズマブは、日本発の産学連携が世界の治療概念を変えた創薬イノベーションの好例である。



中山　優季　氏　（公益財団法人）東京都医学総合研究所
社会健康医学研究センター　難病ケア看護ユニット
ユニットリーダー

『難病看護の始まりとこれまで、そしてこれから』

難病看護は、単に治療を支えるだけでなく、患者が病いを抱えながらも「その人らしく生きる」ための生活環境を支える実践である。その原点の一つが、薬害スモンを契機とした患者・医療者による社会活動であり、1972年の難病対策要綱の成立にもつながった。さらに、在宅人工呼吸療法などの医療技術の進歩により重い障害を抱えながら地域で生活する患者は増えている。

一方、ALSなどでは病状の進行に伴い意思を伝えることが困難になるという課題がある。

そこで現在、脳波や脳血流、視覚誘発電位などの生体信号を活用し、身体を動かさなくても意思を伝えられるコミュニケーション技術の研究が進められている。看護と先端技術、多職種連携の融合は、難病患者の尊厳と自己実現を支え、新たな人生の可能性を切り拓く重要な取り組みである。